

○

(どうも気になる男が一人ある。

奥さんに信を得ている反猶太観の馭車で庭師のジョゼフ、あたしはあの男に信が置けない。)

ゆっくりと滑るように行く歩き方も、あたしには気味が悪い。背中も怖いし、あの幅広な力の籠ったあの頸も怖い。

あたしがジョゼフの内に新たに、そして深刻に見出したもの、それがあたしの心を

転倒させる。肉感的な、キュッとさせる、恐ろしい、陶酔させるような空気があたしの

心をを転倒させる。。

立たせる半ば恐怖を持ち、半ば牽かれて行く。

ジョゼフは、兇行のあの土曜日、ライオンの森へヒースの土を採りに行っていた。

(家鴨をしめる時には、ノルマンデイの習慣に依って、首にピンを刺してやっける。苦しませずに、一息に殺せば殺せるのに、ジョゼフは、巧みにその断末魔の苦痛を長引かして喜んでいる。自分の手の内で、鳥の肉が顫え、心臓が鳴るのを喜ぶ。自分の手の内に、鳥の苦痛、臨終の顫え、死を、段々と眺め、計り、考えるのが好きなのだ。)片手に家鴨の頸をつかみ、片手で、ピンを頭に打ち込み、のろく、規則正しくそれをぐるぐる廻す。丁度、珈琲でも挽くよう。ピンを廻しながら、ジョゼフは、荒々しい喜びに充ちていった。鳥は、翼を出して、バタバタもがいた。頸が、凄い螺旋状を呈して振れ、羽の下の肉がピクピクすると、鳥を台所の敷石の上に放り出して、両肘を膝に置き、頸を手の平で支えながら、満足しきったような片目で、鳥が身を顫い、痙攣し、黄色な脚で地をかくのを眺めはじめた。「苦しめば苦しむだけ、血がいい味になるんだぜ。こいつが面白いんだ。俺はこれが好きなんだ。」(上巻p214)

○

「お前、俺にそっくりさ、セレスチーナ、魂がそっくりなんだ、魂が似通っている」(p111)

「俺は、シェルブール生まれなんだよ」(上p223)

「俺はシェルブール生まれなんだよ。水平や兵隊や愛国者達がうろついていて、叫び喚いて、喉を干涸びさせている。港よりの素敵な場所にある小さな力

フェでも手がけりゃ、顛や二千の金を手にするな、雑作ないことなんだ。ただここに、女が一人欲しいんだ。」

小ざっぱりしたカフェ、キラキラ光るカフェ、勘定台の大鏡の後ろに、アルザス・ローレン風の美人が立っているんだ」

その万力のような腕で、しっかりとあたしの身体を抱きすくめた。
小クレエルの口を被い、喉を絞め、惨殺したあの手で、あたしを抱きしめ、
小クレエルの血みどろな傷口に接吻したあの口で、あたしに繰り返し繰り返し
いった(上p22)

○

「ねえ、ジョゼフ、森の中で、小クレエルを手込めにしたのは、お前さんだろう？」

「怖いよ、お前さんが怖いよ。ジョゼフ、なぜお前さんがこう怖いんだろう」

そのシャツの袖は、肘の所まで捲くしあげられている。太い柔らかな、通勤機のように油ぎった、抱きしめるに工合のいい腕の筋肉は、白い皮膚の下に、力強く、敏捷に働く。上腕と上腕二頭筋の両側とに、燃えるような心臓や、花瓶の上に交叉された短刀なぞの刺青を見た。男性の、あたかも野獣のような強烈な臭気が、広い、鎧のように湾曲した胸から発散する。この力と、臭いとに陶然として、さっきジョゼフが馬具の金具を磨いていた台の上に、あたしは寄りかかった。グザビエさんもジャンさんも、その他の人々も、この残忍な獣のような顔をして、頭の光った、中老年人が、あたしの胸に烙り(やき)つけたような強い印象はくれなかった。(p118)

●シアリゴー

シアリゴーのその容姿と謂えば、身には途轍もないフィリップ風のフロックコートに纏い、襟に結んだカラーやネクタイは、思い切った1830年代もの、とても素敵な膨らみを持った天鷲絨のチョッキ、見てくれがしにひけらかす宝玉。とり出す葉巻は、金紙に捲いてあった。でもつけ焼き刃の悲しさ、俄ごしらえの新し過ぎ。

奥さんの方は、これまで質素な地味な風をしていたものが、これまた、ケバケバしい化粧をし、髪の毛は真っ赤に染め過ぎ、ペラ棒に大きい宝玉をつけ、馬鹿値の絹を纏い、まるで共同洗濯場の女王か謝肉祭の皇后様。

「社交界の人になるってことが、こんなに困難な、骨の折れる、面倒くさいものだったとは知らなかったよ・・・」

「太い指の間で汚らしいパンを丸めてばかりいて、変だったらありゃアしない、恥ずかしいじゃありませんか！」

「一体お前の青い着物は何だい？お前の薄笑いは何だい」

●○金持ちの犬(p33、34)

肉屋は、貧乏な老婆には、銅の鍋に投げ込んであった細切れの中から、半分骨の、半分脂の、ひどいところを選び出し『15スウ』で売り、奥様の犬には、真っ赤な上等の肉片を長く切って、投げてやる。ああ、金持ちの犬！こりゃア貧乏人じゃないんだ。

○銀器磨き(銀器を目にした奥さんの目 p53)

その銀器を前にした奥さんの眼！あたし達の手で洗されるその銀器の前での奥さんの眼！こんな貪欲な相をした女の眼は、見たこともない・・・

あたし達の行くところ、主人は扉を閉め、缶に印をつけ、引き出しに固く錠を下ろし、麵包菓子や梅干しの数をかぞえ、絶えず、刑事のような白目を、あたし達の手の中、行李の中に滑り込ませる。扉も戸棚も引き出しも缶も、あたし達をさして、《泥棒！泥棒！泥棒！》と叫び立てる。(p97)

○鐘の音(p87)

ああ、鐘の音はなんという優しいものだろう！あの音は人の心のうちに、遠い昔の、忘れはててしまったいろいろのことを思い浮かばせる。鐘の音を聞くと、いつもあたしは目を閉じて耳を澄ます。すると、恐らく見たこともなかったような景色、または、幼年、少女時代の移り変わりの思い出が侵み込んでいる懐かしい種々の景色が脳裏に浮かび出る。砂浜に続く野原に、晴れ着を来た村人が、三々五々、ゆるゆると歩いている。ブルターニュの角喇叭が鳴り響く・・・これは、格別、陽気な音じゃアない。寧ろ、恋のようにうら侘しくもある。しかしあたしはその音が好き。巴里では、噴水の番人が吹く角笛と電車の煩い喇叭の音のほか聞けやしない。

○ストリキニーネ(p98)

仮に一人の料理女があつて、これが毎日、主人の命を握っている掌中に一塩のかわりに砒素を一掴み・・または酢のかわりにストリキニーネの一滴をとつたら・・それでいいんだ・・ところが、それが出来ない・・ああ、あたし達の中には奴隷根性があるに違いない！

●ポール・ランソン教区司祭長

「教会の上に真裸の男を見たのです」

「わたくしは、何もその男が信者だとは申しません。だって石で出来ているんですもの」

「石なら、裸じゃアないと仰有るんですか。」

「その石の男は、あなたがお考え以上に裸なのですよ、あの・・あの、恐ろしい・・あの、あれを・・ああ、牧師さま、私に汚らわしい言葉を口にさせないで下さい。」

「しかも幾世紀か前から、あすこにあつたのです・・あなたの教会を汚して・・女であり、尼僧であり、貞操の誓を立てたこの私がそれを見つけて、貴方のところへ、《司祭長さま、悪魔が教会におります》って、叫びにこなければならないとは・・」

夜は、月がなくて暗かった。高く教会の上、悪魔や聖者の晦渋な石像が交錯していた。司祭長は、金槌と鑿(のみ)と灯籠を持って梯子を登り、金槌を振った。《主よ、我らを救い給え》《主よ、我らを救い給え》《ああ！豚め！豚め！》司祭長は、この淫猥な聖像に一撃を与えた

●ボニファス尼

○(p92)

「もう暫くの辛抱ですよ。いい口があつたらば、と、いつもお前さんのことを心掛けています、飛び切りの口を見つけてあげようと思ってね、方々、探しているんですが、お前さんに適当な、相応しい家が出て来ないので、ねえ・・」

尼僧たちが、あたし達を餌にする、だれ憚らぬ、いけ図々しさであつた。(そこは、婦人救済所であり、女中の周旋所。)基督教の慈善の骨頂は、自分の方から食料を支払う召使いや女工を見つけて散々、使いまわした上、わずかばかりの臍繰りを、平気の平左で捲き上げること・・そして、ご費用の方はというと、こりゃア御均等にとりあげる。

一何！あんまり馬鹿におしでないよ。朝から晩まで畜生同様に働いてやって、うんと儲けさせて、おまけにこっちにゃあ、犬も喰わないようなものをあてがっておいて、金を出せとは何だい、ふざけんない。

一さあ、やるならやってみてご覧。坊主の汚い猿股を繕ったり、貧乏人のパンをくすねたり、毎晩、寝室のあのさまに幾分でも儲けるのが、信心だっていうんなら。しかも、毎晩の寝室の出来事をちっとも知らないんだって！さあ、このあたしの前で、そう云えるなら云ってみろ！お前さん達は、幾らか儲かるもんだから、あれを煽り立てているんじゃないか、そうだと、自分達の儲けになるもんだから！

一エエ、オイ、それが宗教だっていうのかい、監獄と私窩子宿が宗教なら、宗教なんか真平御免だね。アア。おい、行李だ、解ったかい、行李を出しとくれ。



一ほんとに、お宅は清潔ですよ。ご自慢になれましょう。そしてあなたは…いかにもお清潔でございますよ。…それから旦那は？お宅は？…魔窟！
魔窟にだってこんな汚いのはありやアしないや！